

# 「搬動語法」の統語構造について

人見明宏

## 0. 序

「搬動語法」とは関口存男による命名であるが、その一例が以下の文 (1) である。

(1) Er trank seine Kollegen unter den Tisch.

この文が一見奇異な印象を与えるのは、動詞 *trinken* が「人間」を表す「目的語」および「～へ」を表す方向規定と結びついているためである。搬動語法を知らずにこの文を和訳すると「彼は同僚たちをテーブルの下へ飲んだ」となるが、実際には「彼は同僚たちを飲みつぶした」を意味する<sup>1)</sup>。

関口自身が指摘しているように、この搬動語法と結果構文<sup>2)</sup>は類似したものであるとされる。人見 (2011) では、部分的に添加成分の述語形容詞を伴った結果構文の統語構造についても論じ、その統語構造も明らかにした。その際行った考察が、搬動語法の統語構造の分析に適用することが可能であると考えられる。

そこで本論文では、まず搬動語法の特徴とその例を挙げる。次に述語形容詞を伴った結果構文の統語構造に関して、人見 (2011) の考察を概観して、これを搬動語法の統語構造の分析に適用することによって、搬動語法の統語構造を明らかにし、依存関係文法でこの統語構造をいかに記述すべきかを考察する。

## 1. 搬動語法

以下では、まず搬動語法がどのような特徴を持つのかを考察し、次に、搬動語法の例を挙げる。

### 1.1. 搬動語法の特徴

関口が命名した搬動語法を構成する要素は、動詞の他に、目的語<sup>3)</sup>と方向規定である(関口(1966) S. 43 f., 関口(1983) S.459)。以下の例(2)は搬動語法の例であり、*ihr Kind*が4格目的語、*in den Schlaf*が方向規定<sup>4)</sup>である。

(2) Sie wiegte ihr Kind in den Schlaf.

また、(2)と同じく、(3)も4格目的語(*das Bild*)と方向規定(*an die Wand*)が用いられているが、(3)は搬動語法とは認められない。

(3) Sie hängte das Bild an die Wand.

(3)における動詞 *hängen* は1格の主語、4格目的語および方向規定を補足成分として支配する3価動詞であり、「～を～へ掛ける」を表す。一方、(2)における動詞 *wiegen* は、1格の主語と4格目的語を補足成分として支配する2価動詞であり、「～を揺り動かす」を表す。この意味での *wiegen* は、方向規定とは通常結び付かない動詞である。つまり搬動語法とは、統語的には「本来方向規定とは結び付かない動詞が、方向規定を伴う構文」と定義することができる。

次に、搬動語法の表す意味であるが、関口は、その「意味形態」は *bringen* であると述べている(関口(1966) S. 44, 関口(1983) S.459)。また、有田は *bringen* 型で、「～しながら～を～へと運ぶ」(有田(1990) S.90)と、橋本は「動詞に *bringen* 『もたらす』『到達させる』の意味が加わる」(橋本(2009) S.390)としている。橋本によれば、先の例(2)は次のように書き換えることができる。

(2') Sie brachte durch Wiegen ihr Kind in den Schlaf.

つまり、(2)は「彼女は子供を揺ることによって眠りへともたらす → 彼女は子供を揺すって寝かしつける」の意味になる。このことから、搬動語法とは、意味的に「…することによって / …しながら～を～へもたらす」を表す構文であると言える。

最後に、搬動語法で用いられる4格の名詞句と方向規定について考察する。動詞 *wiegen* が「～を揺り動かす」を意味している先の例(2)で、上記のとおり4格の名詞句は動詞の補足成分である目的語であり、以下のaのようにこれを削除すると非文になる。一方、方向規定は、本来動詞 *wiegen* とは結び付かない要素であり、bのように削除可能で、動詞の添加成分である。なお、cのように4格目的語と方向規定の両者を削除したときも、非文になる。

(2) Sie wiegte ihr Kind in den Schlaf.

→ a.\*Sie wiegte in den Schlaf.

→ b. Sie wiegte ihr Kind.

→ c.\*Sie wiegte.

次の例(4)も搬動語法の例であるが、この場合は(2)とは事情が異なる。aのように4格の名詞句 *seinen Freund* を削除すると非文になる点は、(2)と同じである。しかし、bのように方向規定 *unter den Tisch* を削除した場合は、意味的に許容できない文になる。また、cのように、4格の名詞句と方向規定の両者を削除した場合は、非文とはならない。

(4) Er trank seinen Freund unter den Tisch.

→ a.\*Er trank unter den Tisch.

→ b.<sup>??</sup>Er trank seinen Freund.

→ c. Er trank.

(4)の動詞 *trinken* は、これが他動詞の場合は、4格目的語に「液体、飲料」を表す名詞が用いられ、「生物、人間」を表す名詞は通常用いられない。従って、この *trinken* は自動詞で「酒を飲む」を意味すると解され、*seinen Freund* は、*trinken* の本来の目的語ではなく、擬似目的語である。そのため、bは意味的に容認不可能な文となる。

4格の再帰代名詞が用いられた、以下の例(5)も(4)と同じことが言える。すなわち、aのように4格の再帰代名詞を削除すると非文になる。また、bのように方向規定 *in den Schlaf* を削除した場合は、意味的に許容できない文になる。一方、cのように、4格の名詞句と方向規定の両者を削除し

た場合は、非文とはならない。

(5) Klaus las sich in den Schlaf.

→ a. \*Klaus las in den Schlaf.

→ b.<sup>77</sup>Klaus las sich.

→ c. Klaus las.

(5) の動詞 *lesen* も自動詞で「読書をする」を意味し、再帰代名詞も動詞 *lesen* の本来の目的語ではなく、擬似目的語である。

(4) および (5) の c から、擬似目的語と方向規定は添加成分であることがわかる。しかし、通常、複数の添加成分が生起している場合は、その各々が削除可能である。たとえば、以下の文 (6) における時の副詞的規定語 *jetzt* および場所の副詞的規定語 *in dieser Fabrik* は、共に添加成分であり、*jetzt* を削除した a、*in dieser Fabrik* を削除した b および両者を削除した c、すべてが非文とはならない。

(6) Der Mann arbeitet jetzt in dieser Fabrik.

→ a. Der Mann arbeitet in dieser Fabrik.

→ b. Der Mann arbeitet jetzt.

→ c. Der Mann arbeitet.

これに対し、(4) および (5) の場合は、擬似目的語のみを削除することも、方向規定のみを削除することもできず、両者を削除した場合のみ非文とはならない。搬動語法における擬似目的語と方向規定は、両者が共起する必要がある、両者の結合が動詞の一添加成分なのである<sup>5)</sup>。

搬動語法の特徴をまとめると、以下のようになる。

- ・本来方向規定とは結び付かない動詞が、方向規定を伴う構文である。
- ・「…することによって / …しながら～を～へもたらす」を表す。
- ・動詞の本来の目的語は補足成分であり、方向規定は添加成分である。一方、擬似目的語が用いられている場合は、擬似目的語と方向規定の結合が一添加成分である。

## 1.2. 搬動語法の例

以下に、a) 動詞本来の目的語が用いられた搬動語法、b) 擬似目的語が用いられた搬動語法、および c) 再帰代名詞が擬似代名詞として用いられた搬動語法の例を挙げる。

### a) 動詞本来の目的語が用いられた搬動語法の例

- $j^3$  auf die Beine helfen    ~を助け起こす
- $j^3$  aus dem Wagen helfen    ~が車から降りるのを手伝う
- $j^3$  in den Mantel helfen    ~がコートを着るのを手伝う
- $j^3$  über die Straße helfen    ~を助けて道路を渡らせる
- einen Nagel in die Wand klopfen    釘を壁に打ち込む
- $j^4$  aus dem Schlaf küssen    ~にキスをして目を覚まさせる
- $j^4$  aus dem Schlaf rütteln    ~を揺り起こす
- $et^4$  in Trümmer schießen    ~を撃ってばらばらにする
- $et^4$  in Stücke schlagen    ~を粉々に砕く
- $j^4$  aus dem Schlaf schütteln    ~をゆすぶる起こす
- ein Kind in den Schlaf wiegen    子供を揺すって寝かしつける

### b) 擬似目的語が用いられた搬動語法の例

- $sich^3$  die Augen nach  $j^3$  [ $et^3$ ] aus dem Kopf gucken [schauen / sehen]  
目をさらにして~を捜す
- $j^4$  zu Boden kämpfen (戦って) ~をねじ伏せる
- $j^4$  aus dem Schlaf [aus dem Bett] klingeln    ベルを鳴らして~を起こす
- $j^4$  aus dem Schlaf klopfen    ドアをノックして~を眠りから起こす
- $j^4$  aus dem Schlaf [aus dem Bett] pochen  
ノックして~を (たたき) 起こす
- $sich^3$  die Zunge aus dem Hals reden    やっきになってしゃべり立てる
- $j^3 et^4$  aus dem Kopf [aus dem Sinn] reden  
~を説得して (考えなど) を捨てさせる
- $sich^3$  den Kummer [den Zorn] vom Herzen [von der Seele] reden  
話をして心配 [怒り] をやわらげる
- $j^4$  in die Patsche [in die Tinte] reiten    ~を困らせる、~を窮地に追い込む
- $sich^3$  die Zunge aus dem Hals rennen    走って息を切らす

*j*<sup>4</sup> zu Boden rennen (走りながらぶつかって) ~を突き倒す

*j*<sup>4</sup> unter den Tisch saufen [trinken] ~を飲み負かす

Äpfel vom Baum schütteln リンゴを木からゆすぶり落とす

den Staub von [aus] den Kleidern schütteln

衣服を振ってほこりを落とす

*j*<sup>4</sup> in den Schlaf singen (子守歌などを) 歌って~を寝かしつける

*j*<sup>4</sup> an die Wand spielen

演技で~を圧倒する; (策を弄して) ~を押しよける

*sich*<sup>3</sup> die Beine in den Bauch stehen

脚が胴にめり込むほど長時間立ちつくす

*sich*<sup>3</sup> den Schnee von den Schuhen trampeln

足をドシンドシン踏んで靴の雪を落とす

*sich*<sup>3</sup> die Augen aus dem Kopf weinen 激しく泣く

c) 再帰代名詞が擬似代名詞として用いられた搬動語法の例

*sich*<sup>4</sup> durch den Schnee arbeiten 雪をかきわけて進む

*sich*<sup>4</sup> in die Höhe arbeiten 働いて出世する

*sich*<sup>4</sup> durch die Gegend betteln もの乞いをしてその地方を回る

*sich*<sup>4</sup> nach Haus fragen 道を尋ねながら家へ帰る

*sich*<sup>4</sup> durch die Stadt fragen 町じゅう尋ねて回る

*sich*<sup>4</sup> bis zur Tür fühlen 手探りでドアの方へ行く

*sich*<sup>4</sup> in die Höhe kämpfen 努力して出世する

*sich*<sup>4</sup> außer Atem laufen 走って息が切れる

*sich*<sup>4</sup> in den Schlaf lesen 本を読みながら寝入る

*sich*<sup>4</sup> in Hitze [in Feuer] reden

話しているうちに(思わず)興奮してしまう

*sich*<sup>4</sup> in Wut [in Zorn] reden 話しているうちに激昂する

*sich*<sup>4</sup> außer Atem rennen 走って息を切らす

*sich*<sup>4</sup> um den Verstand saufen [trinken] 酒を飲みすぎて理性を失う

*sich*<sup>4</sup> außer Atem schwimmen 泳いで息を切らす

*sich*<sup>4</sup> an die Kulisse spielen 演技しながら舞台からさがる

*sich*<sup>4</sup> um sein Vermögen spielen 賭で財産を失う

*sich*<sup>4</sup> in den Vordergrund spielen (いつの間にか) 有利な地位をつかむ

*sich*<sup>4</sup> in Ekstase tanzen 踊るうちに恍惚となる  
*sich*<sup>4</sup> auf die Straße trinken 飲んだくれて路頭に迷う  
*sich*<sup>4</sup> in den Schlaf weinen 泣き疲れて寝入る

## 2. 述語形容詞を伴った結果構文の統語構造

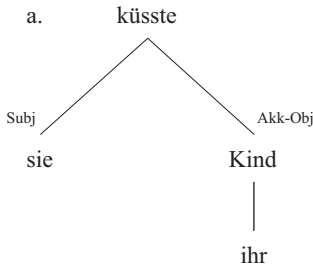
搬動語法は、結果構文の一種、または結果構文と類似の構文であるとされる。関口でも、両者の類似点と相違点が指摘されており（関口 (1966) S. 44 f.）、また有田や橋本もこの点に言及している（有田 (1990) S.90、橋本 (2009) S.390 f.）。そこで、搬動語法の統語構造について論じる前に、以下では、まず述語形容詞を伴った結果構文の統語構造を取り上げる。

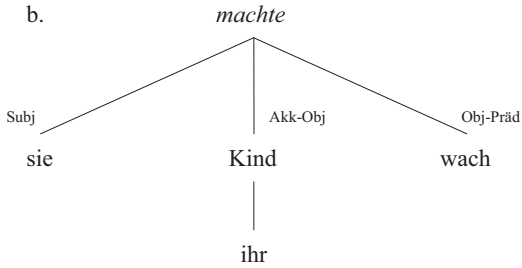
添加成分の述語形容詞を伴った結果構文の統語構造を部分的にはあるが明らかにし、依存関係文法でこの統語構造をいかに記述すべきかを考察したのが、人見 (2011) であり、以下ではその内容を概観する。

以下の文 (7) における *küssen* は 4 格目的語を支配する他動詞である。また、形容詞 *wach* の統語機能は述語内容語<sup>6)</sup>であり、動詞の表す行為によって生じる 4 格目的語 *ihr Kind* の結果的状态を表している。この結果構文 (7) は、以下の a と b の二つの文が統合されたものである。

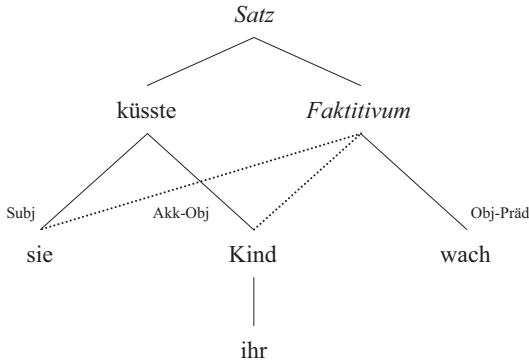
- (7) Sie küsste ihr Kind wach.  
= a. Sie küsste ihr Kind. + b. Sie *machte* ihr Kind wach.

そして、(7) a と b は樹形図で以下のように記述される<sup>7)</sup>。





a と b の二つの樹形図で表された統語構造が統合された文 (7) の統語構造を表したのが、以下の樹形図である。



この樹形図で表されているのは、以下の点である<sup>8)</sup>。

- 1) 文 (7) b で用いられている動詞は、同定の機能を持つ作為動詞 (Faktitivum) の *machen* である。これは、a と統合されて生じた文 (7) では、言語表現として現れない。そのため樹形図では、単に *Faktitivum* と記述する。そして、動詞 *küssen* および *Faktitivum* を頂点とする二つの統語構造が統合されていることを明示するために、これらのさらに上位に *Satz* という概念を導入する。
- 2) 他動詞 *küssen* に支配された補足成分は、主語 *sie* と 4 格目的語 *ihr Kind* であり、両者はそれぞれ *küssen* と結合線で結ばれる。
- 3) 目的語の述語内容語 *wach* は動詞 *küssen* によって支配された補足成分ではない。そのため、この述語内容語は *küssen* とは結合線



で結ばれず、*Faktivum* と結合線で結ばれる。また、このことによって、目的語の述語内容語が動詞 *küssen* の添加成分であることを示している。

- 4) *Faktivum* と *sie* および (*ihr*) *Kind* とを結び付けている結合線は、*Faktivum* と *sie*、*ihr Kind* および *wach* との関係を示しているものであり、言語表現に実際に現れている要素間の連結 (*Konnexion*) と区別するために、点線を用いている。

### 3. 搬動語法の統語構造

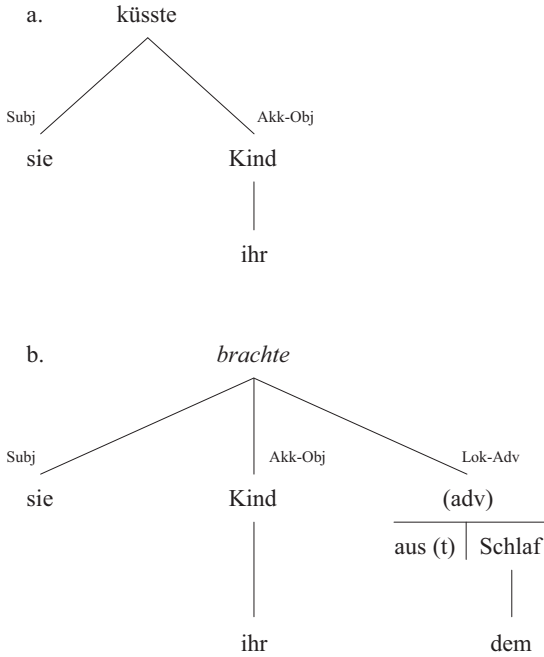
以下では、2で概観した述語形容詞を伴った結果構文の統語構造に関する考察を、搬動語法に適用して、この統語構造を明らかにし、依存関係文法でこの統語構造をいかに記述すべきかを考察する。まず、動詞本来の目的語が用いられた搬動語法について、次に擬似目的語が用いられた搬動語法について考察していく。

#### 3.1. 動詞本来の目的語が用いられた搬動語法の統語構造

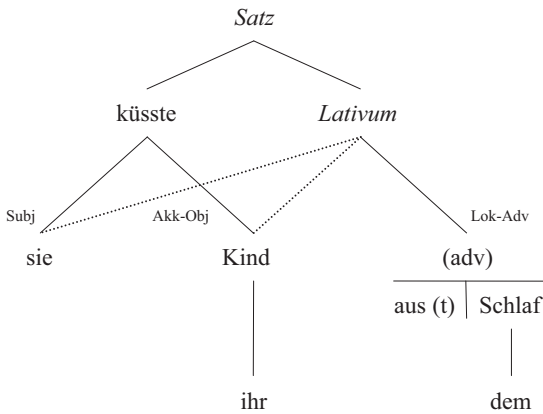
搬動語法の構文は、結果構文と類似した統語構造を有する。結果構文と搬動語法の相違点は、前者が述語内容語を伴うのに対し、後者は方向規定（統語機能は場所の副詞的規定語）を伴う点に、また前者が作為動詞 *machen* で書き換えられるのに対し、後者は搬動詞 (*Lativum*<sup>9)</sup>) *bringen* で書き換えられる点にある。以上から、結果構文と同様に、搬動語法の (8) も、以下の a と b の二つの文が統合されたものと考えられる。

- (8) Sie küsste ihr Kind aus dem Schlaf.  
= a. Sie küsste ihr Kind. + b. Sie *brachte* ihr Kind aus dem Schlaf.

そして、(8) a と b は樹形図で以下のように記述される。



a と b の二つの樹形図で表された統語構造が統合された文 (8) の統語構造を表したのが、以下の樹形図である。



この樹形図で表されているのは、以下の点である。

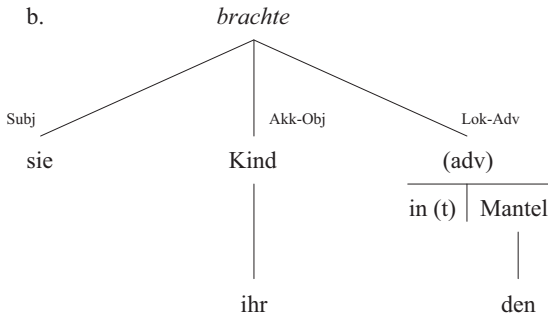
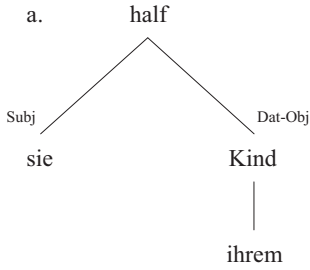
- 1) 文 (8) b で用いられている動詞は、搬動詞 (*Lativum*) の *bringen* である。これは、a と統合されて生じた文 (8) では、言語表現として現れない。そのため樹形図では、単に *Lativum* と記述する。そして、動詞 *küssen* および *Lativum* を頂点とする二つの統語構造が統合されていることを明示しているのが、これらのさらに上位にある *Satz* である。
- 2) 他動詞 *küssen* に支配された補足成分は、主語 *sie* と 4 格目的語 *ihr Kind* であり、両者はそれぞれ *küssen* と結合線で結ばれる。
- 3) (dem) *Schlaf* が変換詞 t である前置詞 *aus* と結び付いた *aus dem Schlaf* は副詞相当語句 *adv* であり、その統語機能は、場所の副詞的規定語 (方向規定) である。この場所の副詞的規定語は動詞 *küssen* によって支配された補足成分ではない。そのため、これは *küssen* とは結合線で結ばれず、*Lativum* と結合線で結ばれる。またこのことによって、場所の副詞的規定語が動詞 *küssen* の添加成分であることを示している。
- 4) *Lativum* と *sie* および (*ihr Kind*) とを結び付けている結合線は、*Lativum* と *sie*、*ihr Kind* および *aus dem Schlaf* との関係を示しているものであり、言語表現に実際に現れている要素間の連結と区別するために、点線を用いている。

3 格目的語を支配する動詞 *helfen* が用いられた (9) の場合は、以下の a と b の二つの文が統合されたものである。

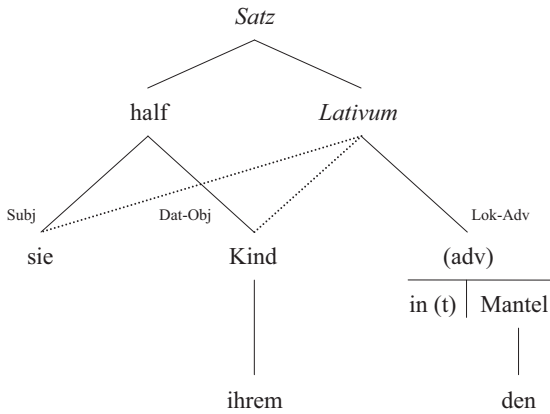
(9) Sie half ihrem Kind in den Mantel.

= a. Sie half ihrem Kind. + b. Sie brachte ihr Kind in den Mantel.

そして、(9) a と b は樹形図で以下のように記述される。



a と b の二つの樹形図で表された統語構造が統合された文 (9) の統語構造を表したのが、以下の樹形図である。



この樹形図で表されているのは、以下の点である。

- 1) 文 (9) b で用いられている動詞も、搬動詞 (*Lativum*) の *bringen* である。これは、a と統合されて生じた文 (9) では、言語表現として現れない。そのため樹形図では、単に *Lativum* と記述する。そして、動詞 *helfen* および *Lativum* を頂点とする二つの統語構造が統合されていることを明示しているのが、これらのさらに上位にある *Satz* である。
- 2) 自動詞 *helfen* に支配された補足成分は、主語 *sie* と 3 格目的語 *ihrem Kind* であり、両者はそれぞれ *helfen* と結合線で結ばれる。ここで留意すべき点は、目的語に関しては、(9) の a では *helfen* に支配された 3 格、b では *bringen* に支配された 4 格であるが、a と b が統合された (9) では 3 格であることである。ここから明らかになるのは、(9) では、*Lativum (bringen)* ではなく、あくまでも動詞 *helfen* が目的語の格支配をしていることである。
- 3) (den) *Mantel* が変換詞 t である前置詞 *in* と結び付いた *in den Mantel* は副詞相当語句 *adv* であり、その統語機能は、場所の副詞的規定語 (方向規定) である。この場所の副詞的規定語は動詞 *helfen* によって支配された補足成分ではない。そのため、これは *helfen* とは結合線で結ばれず、*Lativum* と結合線で結ばれる。またこのことによって、場所の副詞的規定語が動詞 *helfen* の添加成分であることを示している。
- 4) *Lativum* と *sie* および (*ihrem*) *Kind* とを結び付けている結合線は、*Lativum* と *sie*、*ihrem Kind* および *in den Mantel* との関係を示しているものであり、言語表現に実際に現れている要素間の連結と区別するために、点線を用いている。

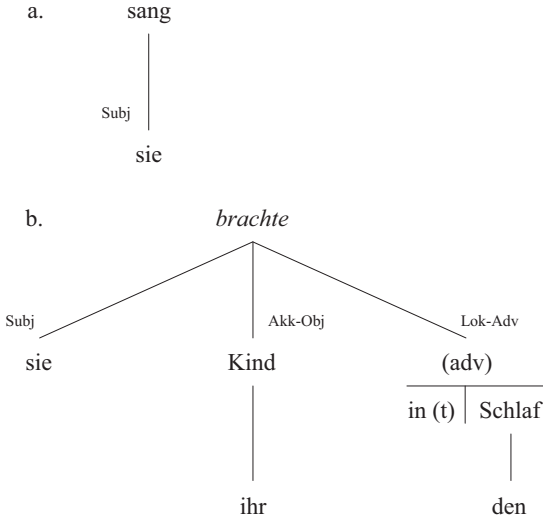
### 3.2. 擬似目的語が用いられた搬動語法

次に、擬似目的語が用いられた搬動語法について考察する。以下の文 (10) の動詞 *singen* は、4 格目的語を支配する他動詞の場合、「歌」などを意味する名詞が 4 格目的語となる。しかし、(10) で生起している 4 格の名詞句は *ihr Kind* であり、したがって、これは *singen* の本来の目的語ではなく、擬似目的語であり、*singen* は自動詞である。擬似目的語が用いられた (10) は、以下の a と b の二つの文が統合されたものである。

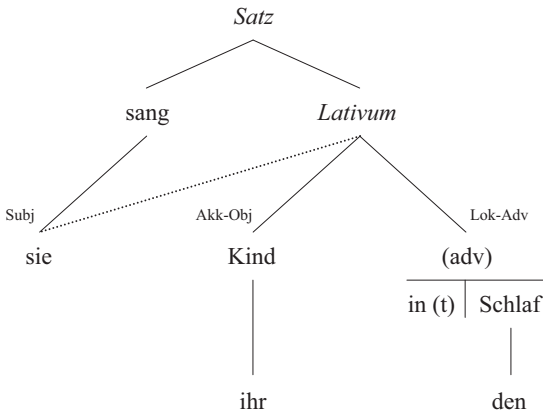
(10) Sie sang ihr Kind in den Schlaf.

= a. Sie sang. + b. Sie *brachte* ihr Kind in den Schlaf.

そして、(10) a と b は樹形図で以下のように記述される。



そして、a と b の二つの樹形図で表された統語構造が統合された文 (10) の統語構造を表したのが、以下の樹形図である。



この樹形図で表されているのは、以下の点である。

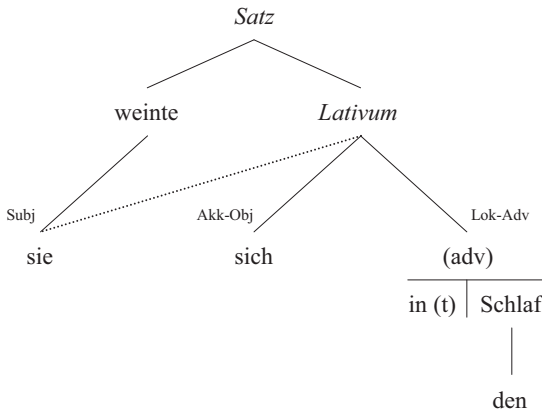
- 1) 文 (10) b で用いられている動詞も、搬動詞 (*Lativum*) の *bringen* である。これは、a と統合されて生じた文 (10) では、言語表現として現れない。そのため樹形図では、単に *Lativum* と記述する。そして、動詞 *singen* および *Lativum* を頂点とする二つの統語構造が統合されていることを明示しているのが、これらのさらに上位にある *Satz* である。
- 2) 自動詞 *singen* に支配された補足成分は、主語 *sie* のみであり、*singen* と結合線で結ばれるのも *sie* のみである。
- 3) 4 格の名詞句 *ihr Kind* は動詞に支配された補足成分ではない。そのため、この名詞句は *singen* とは結合線で結ばれず、*Lativum* と結合線で結ばれる。また *singen* と 4 格の名詞句が結合線で結ばれていないことによって、(*ihr Kind* の統語機能は *Akk-Obj* と記載されるが) *ihr Kind* が動詞 *singen* の添加成分である擬似目的語であることを示している。
- 4) (*den*) *Schlaf* が変換詞 *t* である前置詞 *in* と結び付いた *in den Schlaf* は副詞相当語句 *adv* であり、その統語機能は、場所の副詞的規定語 (方向規定) である。この、場所の副詞的規定語も動詞 *singen* によって支配された補足成分ではない。そのため、これも *singen* ではなく、*Lativum* と結合線で結ばれる。またこのことによって、場所の副詞的規定語が動詞 *küssen* の添加成分であることを示している。
- 5) *Lativum* と *sie* を結び付けている結合線は、*Lativum* と *sie*、*ihr Kind* および *in den Schlaf* との関係を示しているものであり、言語表現に実際に現れている要素間の連結と区別するために、点線を用いている。

擬似目的語が用いられた搬動語法では、擬似目的語と方向規定 (場所の副詞的規定語) は、両者が共起する必要がある、両者の結合が動詞の一添加成分であると述べた。これは、擬似目的語と方向規定が共に *Lativum* の補足成分であり、どちらも削除できない要素であるためである。なお、両者を削除した文が非文とはならないのは、樹形図の *Lativum* を頂点する部分





「搬動語法」の統語構造について



この樹形図で表されているのは、(10) の場合と同様である。

#### 4. まとめ

本論文では、述語形容詞を伴った結果構文の統語構造に関する考察を適用して、搬動語法の統語構造について考察してきた。その結果、搬動語法の文は、結果構文と同様に、二つの文が統合されて生じた文と考えることができることが判明した。そして、この二つのうちの一方には、言語表現には実際には生起していない動詞 *Lativum* を設定し、この二つの文の統語構造が一つの統語構造に統合されていることを明示するために、これら二つの統語構造のさらに上位に、結果構文と同様に、*Satz* という概念を導入することによって、搬動語法の統語構造を依存関係文法の理論において正確に捉えることができ、またその統語構造を樹形図でいかに記述すべきかを明らかにした。さらに、搬動語法の統語構造をこのように捉えることによって、擬似目的語が用いられた搬動語法では、擬似目的語と場所の副詞的規定語（方向規定）の両者が共起する必要があり、両者を削除した文が非文とはならない理由の説明も可能になった。

なお、結果構文においても擬似目的語が用いられる。その場合は、本論文で主張された、擬似目的語が用いられた搬動語法の統語構造を適用できると思われる。擬似目的語が用いられた結果構文の統語構造に関しては、改めて考察したい。

## 注

- 1) 英語にも、He drank all his companions under the table. (小稲(編)(1991) S.2145) という表現がある。
- 2) 関口は「結果挙述の形容詞」という表現を用いている(関口(1983) S.453 f.)。
- 3) 通常4格目的語であるが、動詞 *helfen* など、一部3格目的語が用いられることもある(関口(1966) S. 44, 関口(1983) S.459 f.)。
- 4) 搬動語法で用いられる方向規定は、必ずしも空間的意味を表すものである必要はない。
- 5) 搬動語法は、結果構文の一種であるとも考えられており、Dudenband 4には、結果構文における擬似目的語と述語内容語について、*Die Kombination von Bezugphrase und Prädikativ hat den Status einer Angabe.* とある(Dudenband 4.—*Die Grammatik* (2009) S.791)。
- 6) 人見(2011)では、この *wach* の統語機能を述語内容語的付加語としたが、この名称は適切ではないため、述語内容語と改める。以下の記述においても同様である。
- 7) 以下の樹形図の記述の仕方は、Tesnière および代表的な依存関係文法の研究者の樹形図を参考にしてしている。また、本論文の樹形図で用いられている略号の意味は、以下のとおりである。

Subj：主語 (Subjekt)

Akk-Obj：4格目的語 (Akkusativobjekt)

Dat-Obj：3格目的語 (Dativobjekt)

Obj-Präd：目的語の述語内容語 (Objektsprädikativ)

Lok-Adv：場所の副詞的規定語 (Lokaladverbiale)

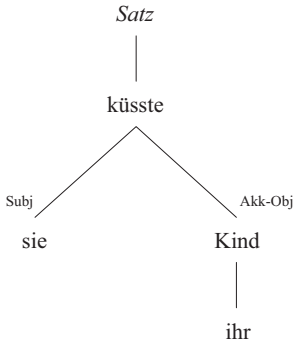
Temp-Adv：時の副詞的規定語 (Temporaladverbiale)

adv：副詞相当語句

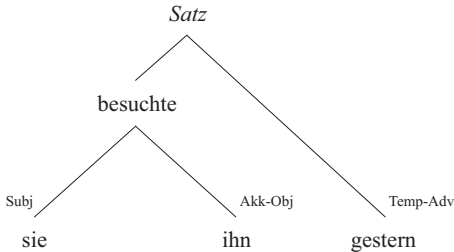
t：変換詞 (Translativ, Translator)

なお、(7) a と b の樹形図も、後述する *Satz* という概念を導入し、(7) a は正確には以下のように記すべきである。

「搬動語法」の統語構造について



しかし、以下では簡略化した樹形図を用いることにする。なお、動詞の支配を受けていない添加成分は、動詞と結合線で結ばず、*Satz* と結合線で結ばれていると考える方が正確であろう。たとえば、*Sie besuchte ihn gestern*. において、時の副詞的規定語 *gestern* は動詞 *besuchen* の添加成分であり、この文は、*Sie besuchte ihn. Das geschah gestern.* と書き換えることができる。この点を考慮すると、この文の統語構造は以下の樹形図になる。



- 8) 以下の説明は、人見 (2012) によるものを整理し、また搬動語法の説明に適用できるように一部変更している。
- 9) 関口は *Lativum* を「搬動語法」および「搬動詞」の意味で用いている (関口 (1966) S. 42 f., 関口 (1983) S.459)。
- 10) *heiße Tränen weinen* などにおける、内在目的語 (同族目的語) は除く。

参考文献

有田 潤 (1990): ドイツ語学講座 IV. 南江堂.  
Der kleine Wahrig. Wörterbuch der deutschen Sprache. (2007). Hrsg. von Renate Wahrig-Burfeind. Gütersloh, München.

- Dudenband 4.—Die Grammatik (1984). Hrsg. von Günther Drosdowski. 4. Aufl. Mannheim.
- Dudenband 4.—Die Grammatik (2005). Hrsg. von der Dudenredaktion. 7. Aufl. Mannheim, Leipzig, Wien, Zürich.
- Dudenband 4.—Die Grammatik (2009). Hrsg. von der Dudenredaktion. 8. Aufl. Mannheim, Zürich.
- Duden. Deutsch als Fremdsprache Standardwörterbuch. (2010). Hrsg. von der Dudenredaktion. Mannheim, Leipzig, Wien, Zürich.
- Dürscheid, Christa (2000) : Syntax. Grundlagen und Theorien. Wiesbaden.
- Eisenberg, Peter (2004) : Grundriß der deutschen Grammatik. Band. 2: Satz. Stuttgart, Weimar.
- Engel, Ulrich (1988) : Deutsche Grammatik. Heidelberg.
- (1994) : Syntax der deutschen Gegenwartssprache. 3. Aufl. Berlin.
- Engel, Ulrich / Helmut Schumacher (1978) : Kleines Valenzlexikon deutscher Verben. 2. Aufl. Tübingen.
- Engel, Ulrich / Meliss, Meike (Hrsg.) (2004) : Dependenz, Valenz und Wortstellung. München.
- Eroms, Hans-Werner (2000) : Syntax der deutschen Grammatik. Berlin, New York.
- Flämig, Walter (1991) : Grammatik des Deutschen. Einführung in Struktur- und Wirkungszusammenhänge. Berlin.
- Flämig, Walter et al. (1981) : Grundzüge einer deutschen Grammatik. Berlin.
- 浜崎 長寿 / 橋本 政義 (2004) : 名詞・代名詞・形容詞. 大学書林.
- 橋本 文夫 (2009) : 復刻版詳解ドイツ大文法. 三修社.
- Helbig, Gerhard / Joachim Buscha (2001) : Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. Berlin, München.
- Helbig, Gerhard / Wolfgang Schenkel (1975) : Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Verben. Leipzig.
- Hentschel, Elke / Harald Weydt (1994) : Handbuch der deutschen Grammatik. 2. Aufl. Berlin, New York.
- (2003) : Handbuch der deutschen Grammatik. 3. Aufl. Berlin, New York.
- 人見 明宏 (2007) : 依存関係文法における相関詞 es + 文肢文について. In : 愛知県立大学外国語学部紀要第39号(言語・文学編)、S. 325-341.
- (2009) : da(r) + 前置詞と文肢文との「相関」について. In : 愛知県立大学外国語学部紀要第41号(言語・文学編)、S. 195-212.
- (2012) : 述語内容語的付加語を伴った文の統語構造について. In : 愛知県立大学外国語学部紀要第44号(言語・文学編)、S. 185-206.
- 川島 淳夫 (編) (1994) : ドイツ言語学辞典. 紀伊國屋書店.

- 菊池 慎吾 / 鐵野 善資 (編) (1996) : 独和中辞典. 研究社.  
小稲 義男 (編) (1991) : 新英和大辞典. 研究社.  
国松 孝二 (編) (2005) : 独和大辞典. 小学館.  
Langenscheidt. Großwörterbuch Deutsch als Fremdsprache (2010). Hrsg. von Dieter Götz, Günther Haensch, Hans Wellmann. Berlin, München, Wien, Zürich, New York.  
Lee, Sun-Muk (1994) : Untersuchung zur Valenz es Adjektivs in der deutschen Gegenwartssprache. Die morphosyntaktische und logisch-semantische Bestimmung der Ergänzungen zum Adjektiv. Frankfurt am Main, Berlin, Bern, New York, Paris, Wien.  
中山 豊 (2011) : 中級ドイツ文法—基礎から応用まで—. 白水社.  
信岡 資生 (2011) : クラウン独和辞典. 三省堂.  
Pittner, Karin / Judith Berman (2004) : Deutsche Syntax. Ein Arbeitsbuch. Tübingen.  
Schumacher, Helmut / Jacqueline Kubczak / Renate Schmidt / Vera de Ruyter (2004) : VALBU—Valenzwörterbuch der deutschen Verben. Tübingen.  
関口 存男 (1966) : ドイツ語学講話. 三修社.  
——— (1983) : 独作文教程. 三修社.  
Sommerfeldt, Karl-Ernst / Herbert Schreiber (1983) : Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Adjektive. Leipzig.  
Stănescu, Speranța (Hrsg.) (2004) : Die Valenztheorie. Bestandsaufnahme und Perspektiven. Frankfurt am Main.  
田中 春美 (編) (1988) : 現代言語学辞典. 成美堂.  
Tarvainen, Kalevi (2000) : Einführung in die Dependenzgrammatik. Tübingen.  
Tesnière, Lucien (1980) : Grundzüge der strukturalen Syntax. Hrsg. u. übers. von Ulrich Engel. Stuttgart.  
富山 芳正 (編) (2011) : 独和辞典. 郁文堂.  
Weber, Heinz Josef (1992) : Dependenzgrammatik. Ein Arbeitsbuch. Tübingen.  
Wöllstein-Leisten, Angelika / Axel Heilmann / Peter Stepan / Sten Vikner (1997) : Deutsche Satzstruktur. Grundlagen der syntaktischen Analyse. Tübingen.  
在間 進 (1992) : 詳解ドイツ語文法. 大修館書店.  
Zifonun, Gisela / Ludger Hoffmann / Bruno Strecker et al. (1997) : Grammatik der deutschen Sprache. 3 Bde. Berlin, New York.